

# 歴史への関心

## — 鍋島をめぐるいくつかの素材から —

講師 九州大学比較社会文化研究院 教授 たかの高野 のぶはる信治さん

第2回「郷土研究講座」は、近世国家による民衆支配や近世の武士の性格等について造詣が深く、『佐賀県近世史料』第8編第3巻の責任編集も担当された高野信治さんに『葉隠聞書』が生まれた背景について「家」という視点からお話ししていただきました。

### 1. 歴史への関心

江戸時代になると人々は歴史に関心を持つようになってきました。そもそも歴史への関心は自分がどんな家族や集団に属しているのか、さらには「日本」に属している意味を問いかけることでもありました。

江戸時代、都市で生活する役人であった武士たちがそれをどのように認識していたのか。また、農工商などの身分の人々が武士の身分をどのようにみていたのかという問題もあります。

### 2. 歴史編さんと鍋島家

江戸時代は「家」を単位とした歴史書がたくさん作られた時代でもありました。徳川家や鍋島家だけではなく村役人クラスまで自分の「家」の歴史を編さんし、記録として残すようになりました。さらに、地域の歴史をも記述しようとする視点も生まれ、『丹邱邑誌』(深江順房)をはじめとした地誌も編さんされました。

### 3. 歴史叙述への関わり

ここでは、鍋島家の歴史編さんに関わった石田一鼎と小川俊方についてお話しします。

石田一鼎は「葉隠聞書」の口述者である山本常朝に強い影響を与えた人物として知られています。一鼎は初代藩主勝茂に近侍し、勝茂の遺命で二代藩主光茂の側役を務めました。父の死を契機に、父同様に「国之柱礎」として藩主として仕えることが歴史叙述の動機になっていると思われます。

公的な歴史書として『隆信・直茂両影像賛』を、私的な歴史書として『泰庵公譜』、『下村生雲行実録』、『石田私史』、『江戸私史』といった著書を残しました。

小川俊方は、27才で年寄役を務め、後に五代藩主宗茂の年寄役を勤めた人物で、肥前に関わる歴

史書や鍋島家の家譜の編さんに関与しました。公的な歴史書としての『直茂公譜』、『勝茂公譜』の編さんに関わるとともに『九州治乱記』編修を馬渡俊継に指示しました。また、私的な歴史書として『焼残反故』を残しました。

『焼残反故』からは、泰平の時代に生きる武士が民衆との身分関係を維持しなければならなかった様子を知ることができますが、武士とは何かという問いかけがあり、「日本」という意識に規定されつつ、肥前の歴史性と武士の生き様を子孫に伝えようとした遺書でもありました。

### 4. おわりに

歴史書の私的な編纂が次第に公的な編纂の性格を帯びるようになります。自分が「家」に属し、さらに自分の「家」が「御家」に属するわけです。さらに「御家」は「日本」のなかにあるものとして意識されるようになります。

佐賀においても同様であり、藩祖直茂が「日峰さん」として祭られることも鍋島家の歴史意識の一つの表れだと考えられます。

(文責：佐賀県立図書館)

